「ベツレヘムの星」

作　中山　夏樹

―登場人物―

山中周一＆男Ｂ　ホテルの経営者
山中真理子　周一の妻
一条明日香　若い女
大場敏孝（トシ）ホテルの居候
松本幸子　ホテルの常連客、女流小説家
三枝直樹　帝都大学医学部教授、周一の友人
ヒトラーの亡霊＆男Ａ
白衣の女
ラジオアナウンサーの声
病院の院内放送の声
教授秘書の声

（第一場）

古い柱時計が時を刻む音と共に、舞台に光が落ちてくる。
古いバス停跡。標識の文字は判読できない。
ベンチには、マントに包まれた男二人が座っている。二人はお互いの存在を無視している。
二人の男が存在しているにも拘わらず、生命が感じられない。
冷たい夕刻、風が吹いている。

澄んだ歌声が、かすかに聞こえてくる。歌声は徐々に聞き取れるようになる。
バイオリンのケースを背負った明日香が、「赤い橋」を口ずさみながら舞台に向かって近づいてくる。バス停に近づき、行き先を確認しようとするが、書いてある文字は判読できない。
ベンチに座る男達に気付き、恐る恐る近づいてゆく。

明日香　こんにちは
男達　……
明日香　こんばんは
男達　……
明日香　……ハロー
男達　……
明日香　あのー、すみません
男達　……
明日香　ちょっとお尋ねしたいんですけど……

男達、明日香の存在に気付きながらも、無視を続ける。

明日香　道に迷っちゃったんです。バスに乗れば何処かの駅に行けるんじゃないかと思うんですけど、この停留所に来るバス、行き先は何処なんですか？
男達　……
明日香　いえ、何処でもいいんです。何処か、電車の駅に着ければ。中野でも、高円寺でも、郡山でも、何処でもいいんです。あと、どれくらい待てば……その……バスは来るんでしょうか？
男Ａ　バスには乗れない
明日香　えっ？
男Ａ　お前はバスには乗れない

明日香　乗れないって、どういうことなんですか？　みなさん待っているじゃないですか。いつ来るんですか？　バス
男Ａ　分からない
明日香　ワカラナイ？
男Ａ　来ないかもしれない
明日香　来ないかもしれない、ってどういうこと？　いつから待ってるんですか？
男Ａ　昔から
明日香　昔って……
男Ｂ　お嬢さん、ローリング・ストーンズ知ってますか？
明日香　え？　はい。聞いたことあります。えーと、ジャズバンドでしょ、昔の
男Ｂ　（馬鹿にしながら）ジャズ？
明日香　園長先生が好きだって……昔のレコード、ＬＰっていうんでしょ？　そのＬＰ、いっぱい持ってましたから
男Ｂ　ロック！　ジャズとロックは違います
明日香　はあ
男Ｂ　ロックは精神の叫び！
明日香　じゃあ、ジャスは？
男Ｂ　（しどろもどろになり）ジャズは……ジャズは……
明日香　そんなに悩まなくても
男Ｂ　ローリング・ストーンズは今も活動しているんでしょうか？
明日香　三年くらい前までオンライン・コンサート開催していたって、ネットに出てました
男Ｂ　オンライン？　ネット？
明日香　はい
男Ｂ　（意味が解らないまま）……そうか、まだそんなに時間は経ってないんだな
明日香　時間が経ってないって、いつから？
男Ｂ　……ジョンはどうしてますか？
明日香　えっ？
男Ｂ　この前解散した、ビートルズのジョン・レノン。「イマジン・オール・ザ・ピーポー〜」ってやつ
明日香　あー、その歌なら知ってます。オノ・ヨーコの旦那さんでしょ。殺されましたよ、随分前に
男Ｂ　随分前って、いつですか？
明日香　私の生まれるずーっと前だから、四十年くらい前かな
男Ｂ　四十年。四十年以上も寝ていたのか、俺は……
明日香　寝ていた？　四十年？　まさか、熊さんの冬眠じゃあるまいし

男B　熊は四十年も寝るんですか？
明日香　え？……そんな、真顔で冗談ばっかり。喩ですよ、たとえ。でも、四十年冬眠する熊って、いったい幾つまで生きるんでしょうね……

男達を無視し、ひとりごとを言いながらバッグの中からグミを取りだし、食べ始める。
男A、片方の靴を脱ぎ、ナルシストか匂いフェチのように靴のにおいを嗅ぎ、うっとりする。
男B、明日香の食べているものが気になり、近づいてじっと見つめる。

明日香　四十年か……二回冬眠すると八十年、その間に動き回れるのは十六カ月位？……そうすると、まだ小熊だ……だけど、四十年も寝ていたら周りの様子もすっかり変わってしまうよね。下手すると、寝ていた場所が射撃練習場になっていて、起き上がった瞬間に射撃の標的にされちゃうかもしれない。最悪なのは、寝ている穴にいきなりショベルカーが一撃……そうだよ、危ないよ、無防備に四十年も寝ているなんて……

明日香、男Bの視線に気付き振り向く。男B、グミを食べる明日香から視線を外さない。

明日香　（視線に耐えきれず）食べます？
男B　ガム？
明日香　グミ
男B　グミ？……グミ……
明日香　そう、グミ、食べます？

男B、無言のまま手を出す。明日香、その手にグミを渡した瞬間、手のあまりの冷たさに驚き、叫び声をあげる。
ＳＥ（恐怖）

明日香　冷たい……何これ？……氷みたい……（気を取り直し）あなた、いったい何者なの？……この冷たさは、何なの？……普通の人間じゃないわね
男B　人間じゃない？　化け物だとでもいうのか
明日香　だって……普通の人がこんなに冷たい訳ないもの
男B　確かにな……冷たいはずだ
明日香　し、死んでるんですか？　あなた達……幽霊？……いやだ、私、恨まれるよう

なことしてません

男B　焦るな！　幽霊なんかじゃない。幽霊とは全く対極に居るんだ……これから生まれる……かも知れない

明日香　これから生まれる？　生まれるって、赤ちゃん？　赤ちゃんには見えないし……冷たすぎる

男B　眠らされていたんだ。液体窒素の極寒の世界で。何年も、何十年も

明日香　？？？

男B　どれ程この日を待ったことか。そして、今日、あなたが私の目の前に現れた。そして私に触れた。名は何というんですか？　あなたは

明日香　明日香、ですけど

男B　明日香か。いい名前だ。いいですか、私達は、これから時間の流れを超えて、引き返すことのできない旅に出るんです。正しく悠久の旅に

明日香　悠久の旅？

男B　そう。私達の

明日香　私達って……誰たち？　まさか私、入ってませんよね。おかしな世界に引きずり込まないで

男B　（険しい表情に豹変し）いいか、明日香！　お前も無関係ではいられないのだ。俺達と言葉を交し、意思疎通のできるお前は、既にプログラムに組み込まれた人間として、大きな流れの中に入り込んでいるんだ。この流れに入り込んだら絶対に出られない。

明日香　そんな……

男B　お前の意志は関係ない。お前に出来るのは、意志無き生命体として、あるがままに、ただ受け入れることだ。すべての出来事を

明日香　やめてください。あなたたちは人間じゃないんですね。わたしは、ただ、バスに乗りたかっただけなんですから

男A　お前はバスには乗れないって、さっきから言ってるだろう

明日香　そんなこと……

男A　お前にできるのは、バスが来るのを待つことだけなんだ。バスから誰が降りて来ようとも、お前はそれを受け入れるしかない。そういう役割なんだ

車いすを押して、白衣の女が登場し、無感情に叫ぶ。

白衣の女　ＫＴ３０５７、ＫＴ３０５７

男B、吸い寄せられるように車いすに乗る。白衣の女は車いすを押して去る。女は明日香の存在に気付かない。

男Ａ　（不気味な笑いと共に）行ってしまったな。お前があいつに接触したからな。あいつはこれから時間を超えた旅に出るんだ。時計の針をぐるぐる回しながらな。そして、その旅の果てで、お前と出会う。それは遠い未来かも知れないし、過去かも知れない

明日香　旅の果てで私と出会う？　そこに私が居るっていうこと？

男Ａ　あいつはお前が来るのを待っていたんだ。何年も、何十年も。この冷たい空間の中でな。一度この空間に足を踏み入れたお前は、たとえどんなに抗おうと、また此処へ戻って来るしかない。そういうことだ

明日香　また此処に戻って来る？

男Ａ　さーて、わしはまた一寝入りするか

時を刻む時計の音、徐々に大きくなる。
明日香、夢遊病者のように車いすの後を追う。

暗転

（第二場）
人里離れた山中の小さなホテル。
薄暗がりの中で、従業員のトシが演歌を口ずさみながらモップで床掃除している。床掃除が一段落し、椅子を並べる。敏が奥に下がると、舞台に光が落ちてくる。
ロビーに常連客の小説家、松本幸子。新聞を広げ、食い入るように読んでいる。
明るい午後の陽射し。小鳥のさえずりが聞こえてくる。
ホテルの女将、山中真理子がコーヒーを手にキッチンから出てくる。

真理子　先生、コーヒーをどうぞ。

松本　ああ、ありがとう。いい香りねえ

真理子　特別のマメですのよ。ジャコウネコのコーヒー

松本　えっ？　ジャコウネコの糞から拾い出したっていう、幻のコーヒー？

真理子　周一さんの道楽なんですよ。

松本　（クンクンとコーヒーの香りを嗅ぎ、口をつける）糞のにおいはしないわよね、美味しい

真理子　本当にバスで帰られるんですか？　周一さんが駅まで送るって言ってますけど。

松本　いいのよ。のんびりと山の風景を見ながらバスに揺られて帰るのが。
真理子　そうですか？

真理子と入れ違いに、山中周一が登場。

松本　こだわりのコーヒー頂いてますよ。本当に美味しい
周一　あー、ジャワ島に住んでいる友人から送ってもらっているんですよ
松本　そうなの（新聞を示し）ところで、この記事読んだ？
周一　まだですけど
松本　まったく驚いちゃうわよねえ、人工授精で生まれてくる赤ん坊が、出生数の三割を超える時代になったんだってねえ
周一　三割？　新聞にそんな記事出てるんですか
松本　「二十五日に開催された日本産科婦人科学会総会において、昨年度の出生数に関する、独自調査結果が報告され、その中で、昨年度の出生総数のうち、その三十三パーセントにあたる約三十万五千件余りが、配偶者間、非配偶者間を合せた人工授精に基づく出生であると発表された。学会長である、帝都大学の三枝直樹教授は『驚くべき速度で人工授精による出生が増加している』と語った。」そう書いてあるわ
周一　三枝ねえ、あいつも偉くなったもんだ
松本　知り合いなの？
周一　ええ、教養部の頃の遊び仲間です。同じ同好会にはいっていたんです。彼は医学部、私は文系でしたけど
松本　教養部の頃の仲間っていうと、山中さん帝都大学出身だったんだ
周一　ええ、経済学部出身です
松本　そうだったんだ
周一　銀行勤めしてた頃ならいざ知らず、今は山ん中のこんなちっぽけな宿屋の亭主ですからね。出身大学なんて、何処でもいいんですよ。誰も興味持ちませんからね
松本　銀行に居たんだ。またどうしてバンカーからホテル経営に……
周一　ほとほと嫌になったんですよ。禿鷹みたいなマネーゲームの世界が。それに、金融業界ってのは、とてつもなく大きな力に支配されてるってのが解ってきたもんですからね
松本　なんとか・マネーってやつね
周一　ええ、まあ
松本　なるほどね……私も帝都出身。文学部フランス文学科、もっとも中退だけどね
山中　名前を残す仕事をやっているのは中退の人の方が多いんじゃないですか。先生

みたいに

松本　あの頃は、学校行っても授業はないし、校舎の陰に行けば角棒持って吊し上げやっているし、みんなギスギスして建前しか言わなかった

周一　本音で語れ、って言っている奴ほど建前に支配されてた

松本　そうね

周一　荒れた時代でしたね

松本　今でも耳にこびり付いてるわ

周一　何が？

松本　「我々はー、この欺瞞的なー、反動国家体制にー、革命を起こすべくー、マルクス・レーニン主義に則りー」とかいきがってさ。アジテーションてのは、なぜか語尾を伸ばして、一本調子になるのよね

周一　確かに。私の頃も同じでしたね

松本　山中さんは何年の入学？

周一　七十一年の入学ですけど、入った頃は、デモとバリケードとロックアウトばっかりでしたよ

松本　私は六十八年。七十年安保改正に向けて、新左翼の連中が勢力争いの真っただ中

周一　機動隊を学内に入れた時期ですよね

松本　（うんざりと）全くね……そうか、三期後輩か。そういや、あの頃、噂があったわよね

周一　えっ？　ウワサ？

松本　男子学生と飲んでるとよく出てきた話だけどね

周一　何です？

松本　さっきの新聞記事。人工授精の記事ね。あの頃、帝都大生の精子は高く売れるって噂が、実しやかに流れてた。派手に遊んでる男子学生は、みんな医学部で精子売って小遣い稼ぎやってるってね。山中さんの頃は聞いたことない？

周一　えっ？　まあ……

周一の妻真理子が奥から出てくる。

真理子　先生、大作の執筆、お疲れさまでした

松本　何とかね。出来が良いか悪いかは別にして、締切には間に合ったわね

真理子　今回はどんな作品ですか。現代もの？

松本　終戦直後の満州を描いてみたのよ

周一　あの時代ですか

松本　戦後の満州の悲劇については、書きつくされているように言われているけどね。

今回私が書いたのは、敗戦後の混乱した満州での、日本人とウクライナ人コミュニティーの関係

周一　コミュニティー？　ウクライナ人が満州に大勢来ていたんですか？　ロシア人社会が有ったって聞いていますけど

松本　実はウクライナ人社会だったのよ。ハルピンだけで一万五千人。一九三〇年代に、命からがらスターリンの圧政から逃れてきた人たちよ

真理子　そうなんですか

松本　一九三一年、大凶作の年に、ウクライナで収穫された穀物をすべてモスクワに強制的に持って行ったのよ。そのためにウクライナで、三百万人以上の餓死者を出した。ホロコースト、歴史的大虐殺よ

真理子　ひどい……

松本　ソ連政府も、今のロシア政府も認めてないけどね

周一　そんなことがあったんだ

松本　農民のいなくなったウクライナの土地にロシア人を移住させて食糧を送り込んだ。それがウクライナ東部のロシア系住民の始まりね。スターリンは生き残ったウクライナ人たちを、シベリアや満州に移住させた。だから満州にはウクライナ人社会が生まれたのよ

周一　なるほど、そういう歴史的背景があったんだ。それで今、クリミアやウクライナ東部で「ロシア系住民を守る」っていう名目で、プーチンが動き出しているのか

松本　戦前の日本の満州政策だって同じことよ。満蒙開拓団を送り込んで、日本国民を守る名目で関東軍が駐留した。歴史は同じようなことを繰り返しているのよねえ

周一　プーチンがウクライナをナチズムと決めつけているのは……

松本　ナチスがウクライナに侵攻した時、ウクライナ人たちの多くがスターリンの圧政から解放されたと感じた。それが始まりね。独ソ戦争で、ソ連側はウクライナ人やバルト三国の人たち、それに少数民族の人たちを前線に出して、後方から前線の兵隊に銃を向けたのよ

真理子　当時は同じソヴィエト連邦の国民でしょ？

松本　そう、前線の部隊が絶対に退却できないようにした訳ね

真理子　退却しようとすると、味方から撃たれるっていうこと？

松本　ザッツ・ライト。無理だとわかっていても、前線を前に進めるしかなかった。結果、なんと三千万人の犠牲者を出して、ナチスドイツに勝利したわけよ。太平洋戦争の日本人の犠牲者が三百万人くらいだから、ソ連の死亡者は日本人の十倍。まったく、何が正しいのかわからないわよね

周一　まったくですねえ

重い空気の中、しばし沈黙。

松本　（気を取り直すように）しかし、今の時代は便利になったわね

真理子　はあ？

松本　昔は編集者にべったりと着かれて、ヤイノ、ヤイノ言われながら原稿渡していたもんだけど、今は、何処に居ようと、原稿のファイルをメールに添付して一発で送れるんだものねえ

真理子　確かに

松本　誰も秩父の山の中から送っているとは思わないわよねえ

真理子　そうですよね

松本　何より、このホテルのことは、何処の出版社も気付いてないからね。ここに居れば、金魚の糞みたいな編集者に追っかけられることもない。一人でゆったり仕事ができる

真理子　それは何よりです

敏、派手なシャツで奥から出てくる。
モップを手に、会話に聞き耳を立てる。

松本　真理子さん。以前から不思議に思っていたんだけど、このホテルで他の客に会ったことがないのよねえ。もしかして、私が来ている間、他の客をシャットアウトしてくれてるんじゃないの？

真理子　「夕陽ホテル」の時は、お一人しかお泊めしないんです

松本　それじゃ、やっていけないでしょう

真理子　大丈夫。特別扱いの「夕陽ホテル」のお客様は三人だけですから

松本　三人？

真理子　先生と、先生からご紹介頂いた村上先生。それと、どなたにお聞きになったのか、去年から来られるようになった本田律子先生

松本　本田さんも来ているの？　村上さんだな、教えたの。あの人、口軽いからな

真理子　三人ものご高名な先生方に、このホテルを定宿にして頂けてるなんて、夢みたいな話です

周一　本当に

真理子　周一さんと話しているんですよ、こういうスタイルで、ホテルを始めて本当に良かったって

松本　夕陽ホテルの客が三人ってことは、夕陽ホテルじゃない時もあるっていうこと？

真理子　周一さんとこのホテルを始める時に決めたんです。二つの顔を持つホテルにしようって
松本　二つの顔？
周一　一つは、お客様がゆっくりご自身と向き合って、お仕事に専念して頂くことのできるホテルの顔。もう一つは、ご家族連れや仲間同士でワイワイ、ガヤガヤと思いきり楽しむことのできるホテルの顔
松本　わかった。それじゃ、もう一つの顔の時って、えーと……
真理子　もう一つの名前は……
松本　待って！……朝日ホテル
敏　はずれー
真理子　惜しい。ホテル・サンライズ
松本　同じ意味じゃない。当たりね
真理子　ダメですよ。意味じゃなくて名前なんですから、ズバリ当てて頂かないと
周一　当たりですよ。先生。真理子が何と言おうと、私が認めます
敏　親父さんは先生には甘いんだからー
松本　そういえば、敏君はここに来て何年になるの？
敏　（訛りながら）何年て言われでもなー。パッと出て来ねな。エーと二〇一一年の地震の後だがら……もう三年になってんでねが
松本　確か福島の浜通りだったよね。敏君の家
敏　そです。原発のニュースで有名になっちまった双葉町っつうとこなんだげどー、もう帰れねえんです
松本　本当に有名になってしまったわねえ
敏　んだー
真理子　敏ちゃんが初めて家に来た時って、先生がいらした時じゃなかったかしら？
松本　覚えてるわよ。でっかい図体でモソっと入ってきて、「給料いんねえがら働かせて貰えねえですか？」って蚊の鳴くような声で
真理子　あの時先生が、「今時珍しい、いい若者じゃない、絶対に悪い人間じゃない。私が保証する。」って言ってくださったから家に住み込んでもらうことになったんですよね
松本　間違いなかったでしょ
敏　ほんだ。こんな良い青年、そこらで見つかるもんでねえ
周一　んだない……すっかり福島弁うつっちゃいましたよ
松本　それだけ福島の言葉は単純化していて流れが良いのよね。第一、単語をアクセントで区別していないのに、意味が通じるのが凄い
真理子　と、言いますと？
松本　例えば果物の柿と貝の牡蠣、果物の桃と太腿の腿、ブリッジの橋とチャップ・

スティックスの箸。みんな一緒なのよ。ねえ、敏君

敏　わがんね

松本　じゃあやってみましょう。敏君、果物の柿は？

敏　カキ

松本　海に居る貝の牡蠣は？

敏　カキ

松本　貝の牡蠣が食べたいときにはどう言うの？

敏　カキが食いてー

真理子　果物の柿出しちゃうわよねー

松本　ところが地元の人同志では通じ合うのよね。どうして間違えないんだろうね

敏　なして間違えねか？……そりゃ、相手が何食いてーか、分かるからだよ

松本　そーなのよ。字面じゃなくて、相手の気持ちを推し量る言葉なのよね、福島弁ていうのは

敏　えへへ、そんなに褒められっと、福島の人間としては照れるなあー

真理子　（暫しの笑の後）本当によく働いてくれるんですよ、敏ちゃん。大分ホテルマンらしくなってきたし

敏、派手な漫画のシャツを見せて、ニコッと笑ってみせる。

周一　マ、センスはともかくとして、来た時にはどうしようかと思いましたけれど、今はもう大概の仕事は任せられるようになりましたよ

松本　ねえ、敏君、大分落ち着いたようね

敏　双葉に帰れなぐなったことは何とも言えねえんだけんどー、この家に住まわせて貰って本当に良がったと思っています。（立てかけていたモップを手にして）先生の部屋、掃除してきます

敏、奥へ入ってゆく。

真理子　あの子、震災で仲のいい妹さんを亡くしたらしいんです。それに、ここ以外に帰れる場所がないんですよ。原発があんな状態だし

周一　ずっと居てもらえばいいじゃないか。うちだって助かるし

真理子　そう思ってるんですよ。でも、故郷に家があるのに帰れないって、なんだかかわいそうでね

松本　本当にね

真理子　（しばらくの沈黙の後）周一さんといつも話しているんですよ。先生にはいつもこうして、執筆のために滞在して頂いて、ホテル冥利に尽きるねって

松本　私はね、地下の裏口から出て、沢沿いの小道を散歩するのが好きでね
真理子　はあ
松本　沢のせせらぎと木の葉を揺らす風の囁きの中に居るとね、頭の中がクリアになって来るのよ。そうなると、天から新しいアイデアが降って来る。小説の登場人物が、自分からしゃべりだすのよ
真理子　静かな小道ですものね
松本　静けさっていうのは、音がしないことじゃなくて、自然の音が聞こえてくることよね。ところで、あの道を沢沿いに下ってゆくと、下の集落まで行けるのかしら？
周一　いやー、道とは言えないような本当の「けもの道」ですけど、五キロ程、沢を下ると集落に辿り着きますね。でも、危ないですから、先生は行かないで下さいよ
松本　私はせいぜい百メートルも歩けば十分よ。下ったら、上って来なきゃならないものね
周一　確かに
松本　沢の小道で天から降ってきたアイデアを、部屋に帰って文字に落とすと、ストーリーがどんどん展開できる。私たち物書きにとっては、正しく魔法の場所よ。気を惑わすものが何もないからかな？
真理子　それって、ある意味ひどい言い方じゃないですか？　何にもないホテルみたいで
松本　何もないのが良いのよ。一切れのパンと赤ワインが少々あればいうことなし
真理子　先生って、先生って、もしかして、イエス・キリスト？
松本　わたしゃ、女だよ
真理子　そういう意味じゃなくて
松本　（笑いながら）そういう意味って、どういう意味よ
真理子　ごめんなさい。マリア様の間違いでした
松本　素直でよろしい。ナンマイダ、ナンマイダ。……あっ、そろそろ時間だ。お名残惜しいけど、出発しますか。（荷物を持って立ち上がり）お世話様でしたお送りしますよ。駅まで
周一　いいのよ。一日たった二便だけのバスを独り占めして帰るってのが、一番の贅沢なのよ。それじゃ、お世話様
松本　ありがとうございました

松本、玄関近くの小さな鉢植えに目を留め、立ち止まる。

松本　この白い花、初めて見るわ

真理子　「オオアマナ」っていうんですよ
周一　この花、英語では「スター・オブ・ベツレヘム」っていうんです
松本　ベツレヘムの星？　処女受胎の星か。さっきのマリア様の話となんとなく繋がったわね。……それじゃ、お世話様。どうもありがとう
周一夫妻　ありがとうございました

ドアベルの音。松本が外に出ると、犬の甘えた声が「キューン、キューン」と聞こえてくる。

松本　（外で）おお、サスケ、また来るからね
二人　お気を付けて、またどうぞ
真理子　（室内に入りながら）先生、今回は一週間で三百枚以上書けたみたいね。
周一　聞いたのか？
真理子　お掃除の時に部屋に入るでしょ、先生、いつもパソコンつけっぱなしだから、先生に言って、パソコン消してもらうのよ。昨日の朝、原稿のファイルを保存しながら、「三百枚突破」って言っていらしたから
周一　今回は、松本先生、予定より早く引き上げたから、今日、明日はお客さん、誰も入れてないんじゃないか？
真理子　そうね。明後日まで、誰も入ってないわ
周一　久し振りにゆっくりするか

真理子、何かを思い出しため息をつく。

周一　どうしたんだ
真理子　今日が何の日か、憶えています？
周一　（思い出し）沙也加の誕生日
真理子　あなたが淹れてくれた、ジャコウネコのコーヒーの香りで吐き気がして……それで妊娠が分かった
周一　そうだったな
真理子　生きていれば二十四歳
周一　二十四歳か、どんな娘に育っていたんだろうな。
真理子　あの子、なんで三年しか生きられなかったんだろう
周一　（間）運命だったんだ。（話題を変えようと）そういえば、松本先生、次の予約を入れていったかい？
真理子　入れてないわ

周一　珍しいな。大体「次はいつ頃」と言ってゆくのにな

嬉しそうな犬の声。続いてドアベルの音。
明日香、息を荒げながら飛び込んでくる。

明日香　すみません。助けてください
周一　どうしました？
明日香　変な男に追われているんです
周一　え？　どんな男？
明日香　顔は見てないんです
周一　とにかく、こっちに来なさい

周一、明日香を奥に招き入れ、ドアの外を見に行く。

周一　誰もいないようだが
真理子　もうちょっと動かない方がいいわ。変な男が来たら追い返してあげるから。（大声で）敏ちゃん！　敏ちゃん！　バット持っといで、急いで！
明日香　すみません

敏、金属バットを持って奥から走ってくる。

敏　ど、どうしました？
真理子　あの子、変な男に追いかけられてるんだって
敏　変な男？　よーし（と、バットを振り回しながら玄関から出てゆく）
周一　（外を窺いながら）ところで、お嬢さん、車じゃないみたいだけど、今のバスに乗って来たの？
明日香　はい。列車を降りた時からずーっとつけられていて……バス停に丁度バスが来たものですから、そのバスに飛び乗ったんです
周一　そのバスに乗ったらここに来たっていう訳か
明日香　私がバスに乗ったら、その男も乗り込んできて、後ろの席から私のこと、じーっと見つめてるようで……バスはどんどん山の中に入って行くし、私、怖くなってしまって……
真理子　ここに来るバス、お客さんほとんどいないしね

敏、戻って来る。

敏　ホテルの周りには誰も居ねみたいだ
周一　そうか。でも、よくこんな山の中の停留所で降りたね
明日香　このホテルが見えたものですから、バスを降りて必死に走って来たんです。その男も、バスを降りたと思います。私、怖くて後を振り向けなかったものですから、はっきりとは分からないんですけど
真理子　バスの運転手さんに相談してみなかったの？
明日香　運転手さんに何て相談したらいいか分からなくって
敏　運転手のケンちゃんだったら、なんでも相談に乗ってくれるのに。丸顔でぽわーんと見えるけど、頼りになる人だから
明日香　えっ？　運転手さん、痩せてて、神経質そうな人でした
真理子　ケンちゃん、風邪でも引いたのかしら
周一　（外を見て）大丈夫みたいだ。誰も居ない。ここのバス停で降りたら、建物はうちのホテルだけだから、その男、別のところに言ったんじゃないかな
敏　俺もう一度、その辺見てきます
周一　頼むよ

敏、バットを持って外に出てゆく。

明日香　有難うございます。私の思い過ごしだったのかもしれません
周一　いずれにしても、今日は泊まっていきなさい。今日のバスはもう終わったから。
明日香　助かります。有難うございます
周一　バスを降りるとき、年配の女の人と会わなかったかい？
明日香　はい。私と入れ違いでバスに乗った方が居ました
周一　（真理子に）入れ違いで松本先生がバスに乗ったんなら、変な男はここでは下りなかったんだろう
明日香　そうかもしれません
真理子　はい、ここに住所と名前を書いて
明日香　はい（と、宿帳に記入する。）
真理子　（記入した宿帳を見ながら）まあ、福島の南相馬。……敏ちゃんの家のすぐ近くね。三年前の地震の時は大変だったんでしょう、大丈夫だったの？
明日香　いえ、まあ、……あの、……後でお話しします
真理子　ごめんなさい。いいのよ。……お部屋にご案内しますね

真理子、明日香を案内し奥へ。
一人になって、必死に何かを思い出そうとしている周一。

周一　（宿帳に目を遣り）一条明日香？　イチジョウ・アスカ……明日香

しばらくして、真理子が戻って来る。

真理子　どうしたの、ボーっとしちゃって

周一　えっ？　あー。　引っ掛かるんだ

真理子　何が？

周一　あの娘に初めて会ったとは思えない

真理子　何それ？　昔の恋人にしては歳が離れすぎているけどね

周一　そんなんじゃない。昔の知り合いとか、知り合いの娘とかじゃなくて……

真理子　何なのよ

周一　もっとずーっと前の記憶のような気がするんだ……お前、あの娘の仕草、死んだ家のお袋に似ていると思わないか？

真理子　えーっ？　いやだ。　お義母さんが生き返って来たって言うの？　しかも若返って。やめてよ、そういうの、気持ち悪い……でも、似ているかも知れないわね……（急に険しい表情になり）もしかして、あなた、いい歳をして、誰かに子供を

周一　冗談じゃない。あの娘の歳からして、もし、あの娘が俺の子供だとしたら、なんだ……その……ナニをしたのは四十前後ってことになる。そんなこと絶対にない。あり得ない

真理子　（周一の顔を覗き込みながら、したり顔で）三十代の頃にはあったみたいね

周一　やめようよ。そういうの。いじめだよ、一種の

敏、外から戻って来る。

敏　ただいまー。誰もいねがったす。どうしたんだろね

明日香、奥から出てくる。

明日香　あのー

真理子　お部屋、如何ですか。気に入って頂けました？

明日香　ええ、とっても。谷間から、向こうの山が見渡せて。……あのー、先程の、南相馬のお話なんですけど

敏　南相馬？　あんた南相馬かね

明日香　あ、はい

真理子　あー、この子、敏ちゃんていって、このホテルを手伝ってもらっているんだけど、あなたのすぐ近く、双葉町から来たのよ。南相馬のお話、無理してなさらなくてもいいのよ

明日香　いえ、お話したいんです。ちょっと訳があって、皆さんに聞いて頂きたいんです

真理子　えっ？……そう？　じゃ、こちらにいらして（と、椅子を勧める。）

明日香　私は生まれてすぐの頃から、南相馬の施設で育てられたんです

真理子　施設？

明日香　はい。「あすなろホーム」っていう小さな養護施設なんです。私、両親の記憶が全く無いんです。母親は私が物心つくかつかないうちに事故で亡くなったそうですし、父親については、全く何も聞かされていなかったんです

周一　聞かされていなかった？

明日香　はい。あの震災までは何も聞いていませんでした。あの地震があった時、私は福島にいました。奨学金をもらって、大学に通っていたんです。福島でもかなり揺れてすぐに停電になりました。しばらくは、何処がどんな状態になっているかは分かりませんでしたが、一時間程して、浜通りが津波で大変なことになっているらしい、という噂が流れてきました。

真理子　大変だったわね

明日香　福島から南相馬まで車で一時間位なんです。丁度、南相馬から車で大学に通っている先輩がいて、「一緒に行くか」って言われて、先輩の車で南相馬に向かいました。

普段なら一時間ほどの距離なのに、所々、崖崩れが起きていて、南相馬に着いたのは、翌朝になっていました

敏　よく辿り着いたねえ。あのめちゃくちゃん時に

明日香　丘の上から街を見た時……（言葉に詰まる）……ごめんなさい。何も無くなっていたんです。街が

敏　大変だったない

明日香　私の育った施設も流されていました。「あすなろホーム」の建っていた場所にはコンクリートの土台だけが残っていました。何人かの知り合いと会いました。そして聞いたんです。園長先生や、他の先生方が亡くなられたこと。学校に居て助かった子供たちは、避難所に行っていることなどです

敏　いやー、なんだかねー

明日香　……一週間程経って、近くで園長室の金庫が見つかりました。警察の立会いの下で、市の職員の方が金庫を壊して中の書類を取り出したんですけど、その中に、私達の出生に関する書類が入っていたんです。その時初めて、私は両親の名前を知りました。……それと、同じホームにいた、五つ年下の男の子が、私

の母親の子、つまり父親違いの弟だったということが分かったんです
周一　実の弟だと知らされていなかったんだ
明日香　ええ
真理子　そう。それで、その、弟さんは無事だったの？
明日香　見つからないんです
真理子　そうなの。いけないことを聞いてしまったわね
明日香　いえ、いいんです。その子はそれ以来、行方が分からないんです
真理子　そうすると、あの津波で
明日香　違うんです。地震が起きた時も津波が街を襲った時間帯にも、間違いなく学校に居たそうです
真理子　そうなの。で？
明日香　津波が収まってからしばらくして、施設から迎えに来たという男の人達と一緒に学校を出たんだそうです。分かったのはそこ迄
周一　その施設の人達って……
明日香　そうなんです。施設から迎えに来られる訳がないんです。その時、もう施設は流されていて、先生方はみんな亡くなっていたんですから。それ以来、プッツリとその子の消息が途絶えてしまったんです。まるで、消えたみたいに
周一　消えた？　どこかに連れ去られたってこと？
明日香　多分……私は金庫から見つかった書類の中に秘密が隠されているような気がして、市役所に行ってみました。ところが、書類は全部内閣府の特命特務室という所から係官の人が来て、その人に渡されたそうです。復旧に来ていた役所の人ではなく、東京からわざわざ書類を取りに来たそうなんです
真理子　その書類には、弟さんのこと以外に何か書かれていたの？
明日香　私を生んだ母親のことが書いてありました。その人は十五年も前に亡くなっていました。弟を生んだ直後に、ひき逃げに遭って死んだそうです。それも、盗難車の
周一　尋常じゃないね
明日香　（厳しい表情で周一を直視し）なぜ、此処で、山中周一さんにこんな話をしているか、わかりますか？
周一　えっ？　どういうこと？　私の名前を知っているんだ
明日香　私達の出生に関する書類を見つけた時、私は出来るだけメモを取りました。ただ、なぜか、私の書類と弟の書類だけが、帝都大学の書式に英語で書かれていました。書類はインクが滲んでいて所々読み取れなかったんですが、父親の欄に書かれている名前は、はっきりと読み取ることができました。……「シュウイチ・ヤマナカ」と
周一　え？どういうことなんだ

明日香　どういうことなのか、それをお聞きしに来たんです
真理子　お聞きしに来たって、主人があなたのお父さん、ってこと？
周一　ちょっと待ってくれ、全く身に覚えがない……どうして……
明日香　私はただ真実を知りたいだけなんです
真理子　あなた！　どういうことなの。
周一　分からんよ、真理子
真理子　あなた、五分前に言ってたじゃない。明日香さんがあなたのお母さんに似てるって。それでも、身に覚えがないっていうの？

真理子、明日香に寄り添う。

周一　何が何だかさっぱりわからない。本当なんだ
真理子　起きてしまったことをとやかく言うつもりはないわ。ここで白を切るのは、この人に失礼じゃない？　かわいそうよ。男らしく説明しなさいよ
周一　「説明しなさいよ」って、何を説明すりゃいいんだ。全く身に覚えのないことなんだから。何かの間違いだよ。ヤマナカ・シュウイチなんて名前の男は、世の中に五万と居る訳だし……
真理子　じゃ、なぜ、お義母さんとそっくりだって、ほんの数分前に悩んでいらしたの？
周一　それは……
真理子　昔、会ったことがあるような気がするって言ってたわね。明日香さんのお母様と昔、よくお会いになったんでしょうね。毎回、何処でお会いになっていらしたのかしら。全然気づかなかったわ。私

いつの間にか敏も明日香に寄り添い、舞台上に三対一の構造を作り上げる。

周一　真理子、決めつけてないか、誤解だよ、誤解
真理子　あたしたちに子供がいないから……明日香さん、あなた幾つ？
明日香　二十三です
真理子　時期的には……そうよ、沙也加がお腹にいたとき、なんていうこと、あの時だったのね（と、泣き崩れる）
周一　真理子
敏　男らしくねえ。親父さん尊敬してたのに、なんで、逃げるんだ
周一　敏、お前まで
敏　お前なんて、気軽に呼ばないでけろ
明日香　あのー

真理子　（気を取り直し、わざとらしく、にこやかに）なーに？
明日香　ごめんなさい。私が訪ねてきたばっかりに
真理子　あなたが悪いわけじゃないわ
明日香　あのー、本当に私の母親のこと、ご存知ないんでしょうか？
周一　知らない。名前は何て言うの？
真理子　（小声で）知ってるくせに
明日香　一条マリと書いてありました
周一　聞いたことがない
敏　やっぱしね
周一　何が「やっぱし」なんだ
敏　浮気するときぁ、奥さんと似た名前の人にしろ、って言うでねえか
真理子　なぜ？
敏　だって、寝言で相手の名前言っちまっても、奥さんにばれね。「真理子」に「マリ」。寝ぼけてベッドの上で「マリー」って甘ったるい声出しても、真理子さんは自分のことだと思うもんな
真理子　マー！　わざわざ私と似た名前の人を、浮気相手に選んでいたっていうこと？
敏　んだべした
真理子　そこまで考えてたんだ……浮気するのに、相手の名前を選んでいたなんて、最低……信じていたのに（顔を両手で覆い、再び泣き出す）
周一　おい、冗談はよせ。本当に知らないんだ。マリって人の名前も。信じてくれ、本当なんだ

真理子と敏、無言のまま周一に冷たい視線を浴びせる。

周一　書類には、他に何か書かれていなかったの？
明日香　（メモを見ながら）スチューデント・オブ・テイトユニブ　ナンバー７１３２０４８
真理子　周一さんの大学時代の学生番号は？
周一　７１３２０４８
真理子・敏　「７１３２０４８」やっぱりね
周一　確かに大学時代の学生番号だ
明日香　この番号を手掛かりに、こちらまでたどり着いたんです
周一　そうか、名前だけじゃここまでたどり着かないよな。しかし……他に、他に、何か書かれていなかったの？
明日香　意味が分からないんですけど、「エー・アイ・ディー」とアルファベットで書かれていました。大文字です

周一　敏！　英語辞典（敏、奥へ辞書を取りに行く）
真理子　ＡＩＤだかＤＩＹだか知らないけれど、そんなことで言い逃れができると思っているの？
周一　何かのキーワードかもしれないんだ
敏　（辞書を周一に渡しながら）これ
周一　ＡＩＤ，ＡＩＤと、え？エイズ？　いや、これはＳが付いてるな。ＡＩＤ……これだ。「アーティフィシャル・インセミネーション・バイ・ドナー」非配偶者間人工授精？
真理子　どういうこと？
周一　そうか、そういうことか……学生時代に医学部の三枝から頼まれて、精子を提供したことがあった。何かの実験に使いたいということだったが……しかし、あれは４０年前だ……明日香さん、今、幾つだって言ったっけ？
明日香　二十三ですけど
周一　計算が合わない。あれを使われたとしか考えられないんだが……
明日香　三枝さんて言いましたよね。もしかして、帝都大学教授の三枝先生？
周一　どうして、あいつを知っているんだ。（間）よし、明日、三枝のところに行ってくる。

暗転

（第三場）
帝都大学、三枝研究室。三枝が白衣の女と打ち合わせしている。

院内放送　循環器内科の赤澤先生、至急内線２５１７迄ご連絡ください。繰り返します。循環器内科の赤澤先生、至急内線２５１７迄ご連絡ください。
白衣の女　東都医大の新藤教授から、実験の再現性についての指摘があることは想定しておかなければいけないと思うんですが
三枝　当然だろう。あそこはうちと同じ研究テーマで学会発表をしている。新藤教授は間違いなく潰しにかかってくる
白衣の女　どんな点を指摘されるでしょう
三枝　有意差のＰ値（ピーチ）を、コンマゼロゴ迄下げることができればいいんだが、この例数では統計学的に無理があるか
白衣の女　やはりエヌ数が足りないでしょうか
三枝　今更そんなことを言っても始まらんだろう
白衣の女　はい……

秘書の声　三枝先生、お客様です
三枝　誰？
秘書の声　山中周一様とおっしゃる方です
三枝　えっ？　入ってもらって
秘書の声　はい

周一登場

三枝　山中、久しぶりだな。ちょっと待ってくれ
（白衣の女に）実験の例数を増やすことは今となっては不可能だ。今あるデータで乗り切るしかない。
白衣の女　はい。画像に関してはいかがでしょうか
三枝　ガンマ・グロブリン投与後に採取した組織写真の解像度をもう少し上げられないか
白衣の女　検討してみます。ありがとうございました。失礼します。（出て行く）
三枝　（周一に）こっちに座って
周一　忙しそうだな
三枝　学会が近いからな。で、急にどうしたんだい。電話くれればよかったのに
周一　うん、まあ……
三枝　今日はあまりゆっくりとは時間が取れないと思うんだ。十時から教授会なんだよ
周一　そうか。忙しいとこ、悪いな。大した用じゃないんだが……
三枝　マドンナは元気か？
周一　マドンナ？
三枝　真理子さんだよ。みんなのマドンナだった。で、話というのは……
周一　いや、ちょっと昔のことを確認したくてね
三枝　何だよ
周一　覚えていると思うが、俺たちがまだ学生だった頃、お前に頼まれて俺の精子を提供したよな。単刀直入に聞くが、あの時の俺の精子は何に使った？
三枝　えっ？
周一　何かの実験に使うから提供してくれ、って言って持って行った俺の精子だよ
三枝　（やや、うろたえながら）どうしたんだよ、急に、そんな昔のこと。忘れたよ
周一　現れたんだよ。若い娘が。俺のお袋の若い時の写真に瓜二つだ
三枝　（取り乱して）えっ？　そんなばかなことがあるか。お前の居所など知らないはずだ
周一　やっぱり何か知っているんだな

三枝　……もしかして、その娘ってのは、一条明日香と名乗ったか？

周一　その通りだ。「一条明日香」と宿帳に記入した。それに、解せないのは、その子は出生に関するメモを持っていて、そこにＡ・Ｉ・Ｄという略号と俺の名前、学生番号が書かれているんだ。どういうことなんだ

三枝　ちょっと待て。（秘書に居る方向に歩き）朝倉さん、教授会には代理で准教授の横田君に出てもらってくれ。……理由？……そんなもの何でもいいじゃないか。大事な患者が危篤状態だ、とでも言っておけばいい。それから……私の部屋には絶対に誰も入れるな。絶対にな

ドアを閉める音

三枝　さて、何処から話せばいいか

三枝研究室とは別空間、ホテル内の何処か。明日香と真理子。

明日香　私の存在って、真理子さんから見たら腹の立つ存在なんじゃないですか？

真理子　どうして？……それは、あなたが周一と血の繋がりがあるらしいからってこと？

明日香　はい。もしそうだとしたら、真理子さんにとって私は、周一さんがよそに作った子供みたいなものですから

真理子　もし周一があなたのお母さんを愛していればね。私だって、かーっと来るでしょうね。でも、よく分からないけど、あなたのお母様とは全く知り合ってもいないみたいだし……それに、昨日初めて会った時から、他人という気がしないの。もし、私たちの娘が生きていたら、こんな感じかなって思っちゃう。

明日香　娘さんって、昨日真理子さんが言われてた沙也加さん？

真理子　三歳の時に亡くなってしまったの。急性骨髄性白血病、どうしようもなかった

明日香　そうなんですか

真理子　生きていたらあなたと同じくらいの歳かな

明日香　……

真理子　別にあなたに腹を立ててなんかいないわよ。あなたのこと嫌いじゃないわよ。なんとなく周一さんに似ているんですもの

明日香　有難うございます。私、昨日は本当にドキドキしながらこちらにお邪魔したんです

真理子　随分勇気がいったでしょう、ここを訪ねてくるのに

明日香　はい。でも、どうしても本当のことを知りたくて

真理子　そうよね。誰でも出自を知る権利はあるものね

明日香　本当なんでしょうか、実験用に提供した精子が受胎に使われたっていう話
真理子　わからないわ
明日香　私って、いったい何なんでしょう。益々混乱してしまって
真理子　考えすぎないで。あなたはあなたよ
明日香　はい
真理子　（話題を変えようと）嘘をついたわね。昨日、入って来た時
明日香　えっ？
真理子　変な男に後をつけられていたなんて嘘でしょ
明日香　ごめんなさい……ああでもしないと入ってこられなかったものですから
真理子　そうよね、「こんにちは」って入ってきて、いきなり「あなたは私の父親の筈です」って言うのも変よね。いいわ、許してあげる……でも、あなたが持っているあのメモ、本当に驚いたわ

三枝研究室に周一と三枝。

周一　まず聞こう。なぜお前は一条明日香の名前を知っているんだ
三枝　俺たちは、毎年、定期的に一条明日香の健康診断のデータを解析していた。発育障害はないか、前癌状態を引き起こす因子はないか、そういった項目について、彼女が十八歳になるまで、かなり詳細なデータを取って、モニターを続けていた。一条明日香は、我々の研究対象だったんだ
周一　意味が解らん
三枝　まず話しておかなければならないのは、これは国家機密に関わる事項だということだ。だから、これから話すことは、お前だけの胸に収めておいてくれ。このことが公になれば、お前も俺も生きていられない
周一　国家機密だと？　一条明日香がか、それとも俺の精子？
三枝　お前の精子は関係ない。お前の精子は、あの子の母親の受胎に使われただけだ
周一　（興奮して）受胎に使われただけ、とはなんだ。ふざけるな！　俺はそんなこと、一言も聞いてないぞ。あの時、お前は言ったじゃないか、タンパク質か何かの実験に使うだけだと。それに、あの、明日香って娘、歳を聞いたら二十三歳だそうだ。計算が合わないじゃないか。お前が俺のをサンプルとして持っていったのは、４０年以上も前だ
三枝　冷凍保存だよ。マイナス１９６度、液体窒素の中で二十年間眠ってもらっていたんだ。一条明日香には間違いなくお前のＤＮＡが組み込まれている
周一　俺の娘ってことか？
三枝　生物学的にはお前の娘だ
周一　生物学的にはだと？　勝手なことしやがって！

周一、三枝の胸ぐらを掴むが、しばらくして冷静になり、手を放す。

三枝　済まなかった……うちの研究室では昔から精子の冷凍保存による損傷レベルをモニターしてきたんだ。保存技術の確立した一九七〇年以降のものは、数十年のタームでは、イン・ビトロ、つまり試験管内で見る限り精子の活性に低下は見られない。おそらく百年単位でも大丈夫だろう。お前から採取したサンプルもこういった範疇に入る。お前のサンプルは、その機能が全く失われていないことを証明するために、母体提供者の受胎に使われた訳だ。

周一　二十年経って実験台にされた、ということか

三枝　ああ。しかし、一九六〇年以前に採取したものは損傷がひどくて、ほとんど機能を失っていた。だが、一つだけあったんだ。一九四五年の春にドイツから運ばれてきたサンプルが

周一　一九四五年といえば、ナチス・ドイツは壊滅状態だったはずだ。その頃のドイツには今と同じレベルの保存技術があったということか

三枝　そういうことになる

周一　で、どうしてそれが国家機密なんだ

三枝　そのサンプルは、この研究室で他のサンプルと一緒に保管されていたが、この一点に限って管理は内閣府、特命特務室なんだ。日本海軍から内務省、総務省を経て内閣府に移管されてきた。厳重に封印されてな。指示がない限り我々も触れることができない

周一　お前はそのサンプルの持つ意味を知っているんだろう？

三枝　知らない……知らない方がいい

周一　知らない方がいい？

三枝　これだけは話しておく。ある時、本省の命令で特務室の医務官がやってきて、そのサンプルを明日香と同じ母親の受胎に使用した。そして男の子が生まれた。つまり、その時生まれた子は、一条明日香の弟にあたる。もちろん父親違いだ。この子についても新生児の頃から俺の研究室で検査データを解析してきた

周一　震災以降もか？

三枝　いや、あの震災でその子の消息が途絶えた

三枝研究室とは別空間。明日香と真理子。

真理子　間違いってことはないの？　その男の子を誰かと間違えてるってこと

明日香　間違えることはないと思います。その子、もの凄く頭が良くて、学校中の皆が

注目してましたから。中学生でありながら、量子力学の方程式を解くような子でしたから。英語もドイツ語もペラペラでした。一度耳にした言葉とか、一度目にしたものはすべてその場で覚えてしまう子でした

真理子　（信じられないという風におどけて）凄い、まるで天才じゃない！

明日香　（真顔で）はい、天才でした

真理子　（おどけた表情を意識的に引き締め）そうは言っても、その時の学校って、ひどい混乱状態だったはずよ。先生たちも、同じような背格好で、似たような顔の子だったら間違えるかもしれないわよ

明日香　絶対間違えることはないと思います。見た目が全然違うんです

真理子　見た目が違う？

明日香　まるっきり白人なんです。赤毛で、鼻が高くて、目が窪んでいて、薄茶色の目で。後からあの書類でハーフ、つまり父親が外国人だと知ったんですけど、普通の日本人とは、全く違う風貌なんです。父親の欄には「オーストリア人」と書いてありました

真理子　その子、いい子だったの？

明日香　いい子？　世間一般で言う、いい子とはちょっと違っていました

真理子　どういうこと？

明日香　頭は良いけど……心を閉ざしたところがあって……人とのコミュニケーションが上手く取れないんです

真理子　そうなの

明日香　両親が居ないのと、外見が他の人とあまりに違うから、小さいころからいじめに遭っていたのかもしれない

真理子　可愛そうに……

明日香　話をしようと思っても、話が続かないんです。「うん」とか「いやだ」しか言わないから。それ以外の言葉を聞いたことがないんです

真理子　まあ！

三枝の研究室。周一と三枝

三枝　そう、U―ボートで運んできたらしいんだ。それをインド洋の真ん中で、日本海軍の潜水艦に移した

周一　そのサンプルが日本に運ばれてきたのか

三枝　海軍はそれを帝都大医学研究所に保管するように命じた

周一　一九四五年の春といえば、ナチス・ドイツが降伏する直前だ。そんな時に、冷凍精子を潜水艦で日本に運ぶなんて、意味のある話とは思えない。馬鹿げてる

三枝　その馬鹿げた話が実行されたんだ。海軍は絶対機密事項としてこれを内務省に

引き継いだ。ＧＨＱの命令で内務省が解体された時、今度は総務省特務室に管理が移管された。もちろん正式な書類など有りはしない

周一　書類が作成されなかったって言うのか

三枝　そうだ。引き継がれた官僚達は下手にアクションを起こすと、証拠隠し、つまり、隠蔽工作の張本人にされることを恐れたんだろう。次から次へ、そのまま先送りを続けた。何代にも渡ってだ。そして、誰も内容を知らないことにして、保管を続けた。正に、日本の官僚体質が、この問題を七十年間に渡って先送りし続けたわけだ

周一　凄い話だ。……最初の話に戻るが、一条明日香が生物学的に俺の娘である、ということと、その国家機密は何処で結びつくんだ。生物学的に弟の父親が誰であろうと、彼女には関係ないだろう

三枝　一条明日香は自分の出生に関する記録を熱心にメモしていったそうだ。それだけなら良かった。だが明日香はシロー、これは弟の名前なんだが、シローの出生に関する記録も、丁寧にメモしたらしい。そこには、暗号化はしてあるものの、精子提供者の手掛かりが書かれていた。特務室では、記録を回収し、一条明日香の居所を必死に探している

周一　明日香をどうしようとしているんだ

三枝研究室とは別空間。明日香と敏。

明日香　敏ちゃんはいつからこのホテルに居るの？

敏　震災の翌年からだな

明日香　じゃ、三年になるんだ

敏　んだ。あん時、俺の家、地震では大丈夫だったんだけんど、原発で避難指示が出て、福島の避難所に入ってたんだー。そんでもって、避難所から復旧活動に通ってたんだけんど、避難所暮らしも何か月か過ぎると、皆だんだんおかしくなってくるんだ

明日香　どういうこと？

敏　地元のボランティアの人が弁当配ってる時だった。避難所で一緒だった六十歳位の人が……普段はいい人なんだよ、その人。その人が「こんな弁当、毎日、毎日食えっか！」って、弁当投げつけたんだ。投げた弁当が、ボランティアの人に当って、中身が飛び散って……ボランティアの人、なんも言わねえで、弁当のクズ拾ったんだ

明日香　なんてこと

敏　それまで俺は弁当投げた人と同じことを思ってた。「また弁当かって」……そん

時、気付いたんだ。被害者が加害者になっちまってるって

明日香　解るよ。あの頃はみんなイライラしてたもの

敏　このままじゃ、嫌な人間になっちまうって思って、知り合いのとこ行くって言って、避難所を出たんだ

明日香　敏ちゃん偉いね。それで、ここに来たんだ。ご家族は居るの？

敏　オフクロがいるんだ。嫁に行った姉ちゃんとこで暮らしてる。なんとか、やってるみてえだ

明日香　お母さんが居るんだ……

敏　……妹が見つかってねんだ。あの日以来

明日香　そうなんだ……

敏　おっかしいな。人にこんなこと話したことなかったんだけんど、明日香ちゃんにはベラベラと喋っちまった。なんでだべ？

明日香　あたしが浜通りの人間だからじゃない？

敏　そっかな？……ところで、なして明日香ちゃんはうまいこと東京弁、話せるんだ？　相馬で育った人でねみたいだ

明日香　震災の年の夏から、東京に出て来て働いていたからね。それに、私の育った施設の人って、園長先生は東京のお役所を退職してきた人だし、ほかの先生達もみんな関東から来た人ばかりだったのよ。だからずーっと私は東京弁の中で育てられたんだ。それに……臆病だったんだよ。自分の気持ちを隠すには東京弁が一番なんだ

敏　んだども、学校行ったらみーんな浜通りの言葉使ってたんだべした。いじめられんかったんか？

明日香　みんなに言われたよ。気取って東京弁、喋ってるって。ときどき仲間外れにされてた

敏　んだべした

明日香　「養護施設には母ちゃんがいねえがら、東京弁しか喋れねえんだ。東京弁喋らねえと、また捨てられっちまうんだと」とか言われてね

敏　辛いことだったなあ。明日香ちゃんみたいに東京弁喋る奴、いねもんなあ

明日香　だけど、小学校低学年迄だよ、仲間外れなんて。高学年になったら仲良しの友達も出来たし、私も自然に福島の言葉喋ってた

敏　どっちも喋れるんだ……んで、どっちの言葉が好きなんだ？

明日香　そりゃ福島弁だよ。東京弁でなんぼ丁寧に喋っても、福島の言葉みたいな「あったかさ」ないもん。「おばんでーす」のあったかさは「こんばんは」には無いし、「あんべぇわりー」って言われたら本当に心配しちゃうもの。……ねえ、敏ちゃん、「おばんでーす」って言ってみて

敏　（照れながら）おばんでーす。おばんでーす。……おばんでーす。

明日香　なんでこんなにあったかいんだろう。涙が出てきちゃう。ありがとう、敏ちゃん

敏　なんだかなあ……明日香ちゃん、バイオリン持っていたようだけんど、バイオリン弾くのか？

明日香　小学校の時から習っていたんだ

敏　凄いなあ……んなこと言っちゃ失礼かもしんねえけど、養護施設で育ったのにバイオリン弾くなんて、何だが釣り合わねえな

明日香　私も、大きくなってから思った。普通の施設じゃないって

敏　ほかの子供たちも、いろんな習い事やってたんかい

明日香　シローにはドイツ語の先生がついていた。東京から週二回来ていたの

敏　なんだろね。不思議だあ

明日香　不思議よねえ

敏　明日香ちゃん、バイオリン、聞かせてもらえねかい

明日香　えっ？

敏　バイオリンって、ナマで聞いたことねんだ。どんな音出すか、聞かせてけろ

明日香　んーん……いいよ。ちょっと待ってて

明日香、バイオリンを取りに部屋に戻る。

敏　んだども、変な話だなあ。養護施設でバイオリン習っていたなんてなあ。大学も行ってたみてえだし、いったい、どっから金出てたんだ。なーんか訳あり施設みてえだなあ

明日香、バイオリンを手に戻って来る。

明日香　あんまり期待しないでね。練習してないし

明日香、バイオリンで美しいメロディーを奏でる。敏、うっとりと聞き入る。

敏　（拍手しながら）すごいなあ、明日香ちゃん。プロみてえだ。聞いたことあるけど、なんて曲だ？

明日香　〇〇の〇〇。好きなメロディーなんだ

敏　いいねぇ

明日香　バイオリン弾いてる時が、一番落ち着くんだ。いやなことがあった時とか、急に不安に襲われた時も、バイオリン弾いていると落ち着くんだ。だから、私の

友達。どこに行く時も、バイオリン持っていくの

敏、黙って明日香の話に頷いている。

敏　昨日から明日香ちゃんの話聞いてると、なんだかよくわかんねけど、明日香ちゃん大変そうだない。でもなー、ここの親父さんも真理子さんもとっても良い人だから、心配ねー。俺にも、なんでも相談してくれな。できっこと有ったら何でもしてやっから、な

明日香　ありがと。ありがとね。……震災前の浜通りに帰って来たみたい

敏　「明日香」って呼んでもいいか？　妹みてに

三枝研究室。周一と三枝

周一　明日香をどうしようとしているんだ？　そいつらは

三枝　おそらく探し出して、消される

周一　なんだって？

三枝　シローの父親の名前が公になれば、日本は世界中を敵に回すことになる。

周一　えっ？

三枝　日本の信頼は失墜して、世界の中で完全孤立することになるんだ。だから、当局は必死だ。この大きなスキャンダルが表沙汰にならないようにな

周一　何なんだ、そのバカみたいな話は

三枝　有り得ないようなことが実際に進められているんだ。特殊部隊が動いているらしい。奴らはまだお前の居場所にはたどり着いていないはずだ。しかし時間の問題だ。一条明日香を遠ざけろ。そうしないと、お前が殺られる

周一　何てことだ、狂ってる。……そこまで当局が動くとすれば、その精子サンプルの主は一人しかいない

三枝　口にするな！　殺られるぞ

暗転

（第四場）

ホテルロビー。

明日香と真理子が寛いでいる。

真理子　それであなたが、立会人になった訳ね
明日香　そうなんです。他に誰も居なくなっていたんです
真理子　大変だったわねえ

急ブレーキの音。周一の車が駐車場に戻って来た。
夕刻。

真理子　帰ってきたみたいね。随分スピード出して来たこと

嬉しそうな犬の声。
周一、意識的に落ち着き払ったように見せながらロビーに入って来る。

真理子　おかえりなさい
周一　ああ、只今
真理子　三枝さんとお話しできました？
周一　ああ
真理子　どうでした
周一　元気そうだったよ
真理子　そうじゃなくて、明日香さんのこと。分かりました？

周一、意を決して明日香の目を見て頷く。

周一　間違いない。明日香さん、いや、明日香と呼んだ方がいいな。明日香、君は私の娘だ
明日香　山中さんが私の実の父親、ということですか？
周一　そういうことになる
真理子　そういうことになるって、どういうこと？きちんと説明してください
周一　今日、三枝から話を聞いて、私も初めて知ったんだが
真理子　三枝さんというのは周一さんの学生時代のお友達で、今、帝都大学の医学部の教授をなさってるの
明日香　はい、知っています
周一　まだ学生だった頃、今から四十年も前の話だが、私は三枝から頼まれて、タンパク質の実験に使うために精子を提供した。三枝の研究室ではそれを液体窒素で冷凍して、なんと二十年後にそれを融解して明日香さんのお母さんの受胎に使ったというんだ。二十年間冷凍したサンプルの機能が失われなかったことを証明するための実験だった、ということだ

明日香　証明するための実験？　それで私が生まれた訳？　……ひどい。私が生まれることが実験だったなんて。……それで、帝都大の先生が毎年来ていろいろな検査をしていたんだ……母親は、母親はそのことを知っていたんですか？

周一　知っていたんだと思う

真理子　何てこと……

周一　話はそれで終わりではないんだ

明日香　どういうことですか？

周一　君は君自身の出生に関するメモを持っていたね

明日香　ここにありますけど

周一　そこに同じお母さんから生まれた子、つまり君の弟に関する記述があったはずだ。その精子提供者、つまりその子の生物学上の父親が誰なのか、それが、君のお母さんが殺された理由なんだ

明日香　やっぱり単なる事故死じゃなかったんですね

周一　メモを見せてくれ、精子提供者の欄になんと書いてあった？

明日香　（メモを渡しながら）何か書いてあったんですけど、日本語じゃなくて、オーストリアという単語以外、さっぱりわからなかったから、写してきてないんです

周一　（メモの空欄に目を遣りながら呟く）何も書かれていない……これなら追われる必要ないじゃないか。馬鹿みたいな話だ。こんなことで狙われるなんて

明日香　狙われる？

携帯電話の呼び出し音。別空間に三枝が現れる。焦っている。

周一　もしもし、もしもし、もしもし

三枝　俺だ

周一　三枝か？

三枝　山中、大変なことになった。俺の部屋が盗聴されていた。午前中の俺たちの会話を、奴らが全部盗聴していたんだ

敏、登場

周一　明日香のメモを見たんだが、弟の父親については何も書かれていないぞ。明日香は何も知らないんだ。当局に追われる理由なんかないんだよ

三枝　もう遅い！

周一　何を言ってるんだ

三枝　聞け！　黙って聞け！　俺は今追われている。奴らは、俺も殺そうとしている。

すぐにお前のホテルにも向かうはずだ。逃げろ。そして、大きな警察署に入れ。奴らは地元警察とは繋がってないはずだ。警察署で保護してもらうしかない

周一　三枝！

三枝　ダメだ。奴らが来た。俺は話し過ぎた。殺られる……お前には迷惑をかけたな……最後に話しておく。例のサンプルの主だが

一発の銃声とともに消える三枝。

周一　もしもし、もしもし。三枝！　三枝！　もしもし、もしもーし……

周一、茫然と皆を見渡す。

周一　三枝が撃たれた

真理子　ど、どういうこと？

周一　落ち着いて聞くんだ。私達も狙われている。相手は銃を持った連中だ。奴らはこのホテルに向かっているらしい。急いで支度をするんだ。車でここを離れる

真理子　なぜ、何故なの？

周一　詳しく話している時間はない。奴ら自身の立場を守るために我々の口封じをしようとしている

真理子　何なの、それって？　なんで私たちが？

周一　後で話す。今はとにかく急ぐんだ！

真理子　わかった。よく分からないけど。……ねえ、サスケも連れてって良いでしょ。置いといたら死んじゃうもの、ね

敏　とんでもねえことんなってきたな

周一　急げよ

真理子　（外に出ながら犬を呼ぶ）サスケ、サスケ

周一　最低限の荷物で出かけるぞ。どうしても必要なものだけ鞄に詰めるんだ

明日香　何が何だか分からないけど、私がここに来たからこんなことになってるみたい……ごめんなさい、私が訪ねて来たばっかりに

周一　気にするな、明日香。実際に私はお前の父親だ。不思議なもんだな。……そんな気がしてきた

明日香　……（周一の言葉に微笑みを浮かべる）

外から真理子の叫び声

真理子　何なの、あんたたち

一発の銃声が轟く。

周一　真理子！

周一、外に飛び出してゆく。後を追う、敏

敏　何があったんだ

明日香　（外を見て）真理子さん！

もう一発の銃声。

周一と敏、血だらけの真理子を抱えながら戻って来る

周一　シャッターを閉めろ

敏　わかった

シャッターを閉める音

敏、台所のシャッターも閉める

周一　真理子！

真理子　（虫の息で）ダメみたい。私死ぬの？……なんで？……うそだよね、ね。……

周一　真理子、大丈夫だ。真理子、しっかりしろ

真理子　……周さん、楽しかったよ。このホテルやれて。……松本先生、書けなくなっちゃうかもね、私がいなくなったら

周一　しっかりしろ、真理子！

真理子　……私好きよ、あの子……あんな子が居たら良かったな、あたし達……しゅうさん、長い間、あ・り・が・と・う（力尽きる）

周一　おい！おい！しっかりしろ、真理子。真理子――！（呼び続ける）

明日香　真理子さん！（床に崩れ落ち、泣き叫ぶ）

突然電灯が消える。敏、スマホを操作

敏　だめだ、電話が通じねえ。何だよ！　奥さんが、奥さんが、……いったい何したって言うんだ

周一　（真理子の脈を見る。心臓は既に止まっている）だめだ……（我に返り）この

ままでは全員殺られる。敏！地下から崖下の沢に出られるのを知っているな

敏　はい

周一　あいつらは、出入口はここだけだと思っているはずだ。明日香を連れて沢を下れ。とにかく沢を下り続ければ隣町にたどり着く。町に着いたら警察署に駆け込むんだ。行け！

敏　親父さんは？

周一　俺はこのホテルに火をつける。火をつければあいつらは入って来られない。お前らは火が燃えている間に出来るだけ遠くへ行くんだ。……明日香、せっかく会えたのにな。気を付けて行けよ。絶対、敏から離れるんじゃないぞ

明日香　一緒に行きましょう、周一さん……

周一　火をつけたら俺も追いかける。敏、沢には野犬が居るかも知れん。バットとナイフを持って行け。それから、灯油を持って来い

敏　わがった

敏、ナイフをベルトに挟み、バットと灯油を持ってくる

明日香　（取り乱しながら）ごめんなさい。私が来たばっかりにこんなことになって。ごめんなさい。真理子さん、ごめんなさい……何がどうなっているのか……さっぱり分からない……助けて、オトウサン……

周一　敏、明日香を頼んだぞ。俺の娘だ

敏　わがった。親父さん、死ぬなよ

敏、明日香、地下に向かって舞台を降りる。残った周一、玄関の床に灯油をまき散らした後、真理子の亡骸を抱き、静かに語りかける。

周一　真理子、「おとうさん」だってよ、明日香が……俺たちの娘にしてもいいか？……いいよな。……ホテル……燃やすぞ……いいよな……ありがとう、真理子。

周一立ち上がり、撒いた灯油に火をつける。あたりが火の海になる。

周一　おぶっていくからな、しっかりしがみついているんだぞ

一斉射撃の音が轟く。叫び声と共に倒れ込む周一。

暗転

（第五場）

第一場と同じバス停。夜。

稲妻の光と音。

ガラス容器に閉じ込められた男Ａ（ヒトラーの亡霊）が、ドイツ語らしき呪文を叫びながら、覆っているガラスを打ち破ろうとしている。

息を切らせながらバス停にやって来る明日香、しばらくして敏が追いかけてくる。

明日香、男Ａを直視する。

バットとナイフを持ってそれを見守る敏。

明日香　あの時、あなたが言っていたのはこういうことだったんだ……

男Ａ　ようやく戻って来たな。わしが言っていた通りになっただろう。

明日香　私のお父さんのこと、シローの周りで起きていた恐ろしい世界。それから、殺された母親のこと。そして真理子さんが殺されたこと……あなたはすべてを知っていたんですね。なぜこんなことに……誰なの？　あなたは

男Ａ　大分近づいてきたようだな

明日香　近づいてきた？

男Ａ　今までお前が目にしてきたことは、話の前段にすぎない。所謂プロローグってやつだ

明日香　プロローグ？　どういう意味？　いったいこれから何が起きるっていうの？

男Ａ　だから、大分近づいてきたと言っただろうが。わしにだ

明日香　あなたに近づいてきた？　どういうこと？　あなたいったい誰なの？

男Ａ、おもむろにマントを脱ぐ。マントの下からナチの軍服が現れる。

そこに立つのは七十数年前のアドルフ・ヒトラー

ナチス党の旗を手に白衣の女登場、ヒトラーに向かい、ナチス式敬礼。

白衣の女　ハイルヒトラー

ヒトラーの亡霊、右手を斜め上にかざす。在りし日のアドルフ・ヒトラーが蘇る。

明日香　（茫然と）……ヒトラー……（と、後ずさりながら）……なぜ……

亡霊　なぜ、わしが日本で生きているのか、不思議に思っているようだな。教えてやれ

白衣の女　ハッ！　遠い昔からヨーロッパを中心に、世界を動かす財力はユダヤ人が握ってきた。二千年前にキリストが始めた大仕事、すなわち「ユダヤ人との戦い」は、いまだに決着していない。ヒトラー総統はご自身でそれを実現されようとした。しかし、ユダヤ人たちの圧倒的な財力に阻まれ、道半ばで闘いの勝利を断念せざるを得ない状況に追い込まれた。もはやヨーロッパに私たちの居場所はなくなっていたのである。……では、どこに？　東方アーリア人の地、日本だ

明日香　何を言っているの

敏　ヒトラーが生きている訳ねえじゃねえか。おめえたちは何者だ

白衣の女（二人を無視して喋り続ける）ドイツ帝国と大日本帝国は同盟関係にあった。総統は、ご自身最後の遺伝子を、U―ボートで日本に託した。インド洋上で日本のロ型潜水艦に移された総統の遺伝子は、案の定、帝都大学医学研究所の中で、米国ユダヤ人達の魔の手から守り通された。……ユダヤとの決戦をするためにその通りだ。来たるべき決戦のために、帝都大学はわしのＤＮＡを守り抜いてくれたのだ。

亡霊　帝都大学？　おめえらが今回起こったことすべての糸を引いていたっていうのか。真理子さんを殺したのはおめえらか

敏

亡霊、不気味な笑い声を漏らす

白衣の女　聖なる民族同士が争い、憎しみ合うようにと仕向けるのが、奴らの常套手段である。ユダヤ人に乗っ取られたウクライナの状況を見よ。民族の対立を煽り、人々が平和に暮らすことを許さない。……民族は現に大地と結びつき、故郷と結びついている。ユダヤ人には帰るべき故郷がない。帰る家を持たない流浪の民なのだ。流浪の民をことごとく抹殺せねば、大地と結びついた聖なる民族は滅びる運命を辿ることになる。何としても、奴らを根絶やしにしてしまわなければならない

亡霊　その通りだ。（狂気の笑い）流浪の民を抹殺するのだ。

敏　ごたく並べんじゃねえ！　なんだか知んねえが、おめえら、ろぐなもんでねえ。なにが大事って、命程大事なものはねえ。俺だって、原発事故で、今は帰る故郷も、帰れる家もねえ。言ってみりゃ、おめえらの言う流浪の民みてえなもんだ。んだども、一生懸命生きねばと思ってる。一生懸命生きて、人のために尽くさねばなんねと思ってる。こっちを生かすために、あっちを殺すなんていうのは、絶対間違ってる。んだべー

亡霊　なんだ、この小僧は。何を話しておるのか、さっぱりわからん。

いいか、原子力という、禁断のパワーを世界にもたらしたのは誰だ。広島、長

崎に飽き足らず、福島まで核分裂の脅威にさらしたのは誰だ？　みんな奴ら、ユダヤに支配されたアメリカである。アメリカは悪の固まりなのだ

白衣の女　パレスチナを見よ。奴らはパレスチナの悲惨な状況を、全世界に広げようとしている。ユダヤは悪なのだ

敏　ユダヤやアメリカが悪だとか、正義だとか言ってんじゃねえ。最初から間違った民族とか間違った宗教がある訳じゃねんだ。誰かが自分達を守るために相手を悪者に仕立て上げてるだけじゃねえか。悪者に仕立て上げられりゃ、そいつらは反撃する。それがずーっと繰り返されてるんじゃねえか

亡霊　黙れ小僧。あいつらは全世界を征服しようとしているんだぞ。わしはアメリカやロシアの大統領に乗り移った。今、ウクライナで起きていることを見よ。明日香よ、お前には分かるな。何としてもわしはこの最後の戦いに勝利しなければならない。明日香よ、同志よ。お前は奴らを根絶やしにするために、お前の役割を果たすのだ。立て、同志明日香よ！

明日香　狂ってる……

敏　同志だって？　おめえ、明日香に何しようとしてるんだ。おかしな真似しようったって、俺が絶対許さねえ

亡霊　黙れ、小僧！　なあ、明日香よ。わしは半世紀以上も待って、わしのＤＮＡを継承する子供を得ることができた。それがお前と同じ母親から生まれたシローだ

明日香　シロー……

白衣の女　シローは同志の手で守られている。……お前は自身がシローの父親違いの姉であることを承知しているな。お前はシローの同胞（はらから）を自身の中に宿すのだ。ヒトラー総統の分身を宿すのだ。さあ、右手を高く掲げ、ナチス党の敬礼をしなさい。ハイルヒトラー！

明日香　冗談じゃないよ。誰がそんなことするもんか

亡霊　お前は逃げられない。これが運命なんだ。さあ、高らかに叫べ、ハイル・ヒトラーと

明日香　いやだ（意志とは関係なく体が固まってゆく）いやだ……ハ……ハ……ハ……ハイル……ハ……

亡霊、見えない糸を操るように明日香の右腕を掲げようとする。

明日香、逃げようとするが動けない。右腕だけが震えながら引き上げられてゆく。

敏　明日香！　（バットを振り上げ、亡霊に立ち向かい）この野郎！

敏は明日香を助けようとするが、亡霊の発する稲妻に撃たれ、大きな叫び声を発し気絶する。
バットとナイフの転がる音。

明日香　敏ちゃん！……（動こうとするが動けない）だ、だめだ

見えない糸に絡められるように亡霊に引き寄せられてゆく。

亡霊　お前は受け入れるしかない。（不気味な笑いを湛えながら）これは二千年に及ぶ闘いなのだ。勝利をもたらす生命が今、正に誕生しようとしている（狂ったような笑い）

明日香、見えない糸から必死に逃れようとするが亡霊に引き寄せられてゆく。

明日香　（泣きながら力を振り絞り、抵抗する）だめだ。できない。いやだ。……いやだ。……いやー！（意識を失いながら）……タ・ス・ケ・テ……

正に明日香が亡霊に接触する寸前、敏、正気を取り戻し、亡霊に体当たりする。
（ＳＥ）暗闇で、亡霊を包んでいたガラス容器が激しく飛び散る音。
亡霊、断末魔の叫び声と共に消える。
雷鳴が轟き、稲妻が光る。
白衣の女、身をひるがえして逃げ去る。
茫然と立ち竦む明日香。
舞台は静けさと明るさを取り戻す。我に返った明日香、倒れている敏を見つけ駆け寄る。

明日香　敏ちゃん、大丈夫？　しっかりして……トシー！

明日香、敏を起こす。敏、意識を取り戻す。

敏　あいつらは？

明日香　消えた。……居なくなった。……（数時間前の出来事を思い出し）周一さんは？お父さんは？……無事にホテルを脱出できた？……生きてる？

敏、ゆっくりと首を振る。

敏　ホテルに火の手が上がった。燃え盛る中で銃声が響いた。親父さんは出て来ねえ。

明日香　嘘、嘘でしょ？　後を追いかけて来るって言ってたじゃない。敏ちゃんも聞いてたよね。……会えたばっかりなのに。嘘だよね、ね

明日香、敏の顔を窺う。うつむいて、何も答えない敏の姿に、ガックリと肩を落とし、座り込む。やがて徐々に顔をあげ、宙を見つめる。明日香の体から魂が抜けてゆく。

明日香　そうなんだ……死んだんだ……逝ってしまったんだ……

明日香、何かに取りつかれたように転がっているナイフを手にし、ジッとナイフに見入る。

明日香　私が父親を確かめようなんて思ったからだ。お父さんだって、真理子さんだって、あそこで幸せに暮らしていたのに……なーんで会いになんか行ったんだろう……あの人たちの中には、私なんて居なかったのに……誰も……誰も私が生まれてくることを望んでいた訳じゃないのに……（悲しい笑いがこみ上げてくる。そして、吐き捨てるように）私なんて、単なる、実験材料だったんじゃない……

明日香、ゆっくりとナイフをのど元にあてる。

敏、素早くナイフを明日香の喉から遠ざけ、ナイフを奪い取る。

明日香、衝撃で倒れこむ。

敏　ばがやってんでねえ。生きねばなんねんだ。お前だってさーんざ見てきたろ、生きたくても生きられんかった人が、浜通りにどんだけ居たか！……生きねばだめだ。何があっても頑張って生きてゆかねばなんねんだ

明日香　教えてよ……敏。（激しく攻撃的に）生きろって言うんなら教えてよ、トシ！どうやって生きて行けばいいって言うの！誰もいないんだよ。誰も……何もないんだよ。なんにも！

敏　んだども、前向いて生きていかなきゃなんねえんだ

赤い、大きな星が現れる。

明日香　赤い星？　あれは……
敏　明日香、大丈夫、大丈夫だあー
さすけねえー（問題ないよ）

明日香、敏に背を向け、動かない。

敏　親父さんのホテルは魔法のホテルだったんだー。朝日が差してきて、夕やけが綺麗に見えて……有名な作家の先生が、３人も定宿にして小説書いてたんだ。先生達言ってたよ、ここに来るとどんどん筆が進む魔法のホテルなんだって。あのホテルがなくなっちまって、先生達、行く場所なくなっちまったんだー。……作んねか、二人で。親父さんと真理子さんの魔法のホテル。サスケみたいな柴犬飼ってよ。
俺、知ってんだ。朝日と夕日の両方が見渡せる丘
帰るべ、一緒に……浜通りへ……福島へ

敏の一言一言に、明日香の目が少しずつ未来に向いてくる。

明日香　海、見える？
敏　えっ？
明日香　その丘から海が見える？
敏　ああ、太平洋の水平線が見える。コスモスの花が咲いてんだ。風に揺れるコスモスの向こうに海が見渡せる。
明日香　……行ってみたい……（何かを言おうとして）敏ちゃん、私ねえ、

消音銃の銃声の音。倒れ込む明日香。

敏　（明日香を抱きかかえ）明日香！　しっかりしろ、明日香！……おい、起きろ！
死ぬな、明日香！　明日香！　明日香！

敏、ゆっくりと立ち上がり、銃口を直視する。

敏　誰だ！　お前ら、いったい何者なんだ。出てこい、卑怯者！
明日香が……明日香が、いったい何したっていうんだ！

再び消音銃の音。倒れ込む敏。

音楽と共に　暗転

（第６場）

同じバス停。バス停にだけ光があたっている。

事件を告げるラジオのニュース放送が流れてくる。

ラジオ音声　「駆け付けた警察によると、二人共に拳銃で撃たれたものとみられるということです。二人の身元は確認できていません。秩父警察署はこれら二つの事件を関連性のある連続殺人事件と断定し、特別捜査本部を設置しました。この二つの殺人事件には、多量の銃器が使用されているものとみられることから、暴力団の関与が示唆されています。秩父警察署は埼玉県警ならびに警視庁の応援を求め、広域暴力団同士の抗争との関連について捜査してゆく方針です。」

舞台溶明。松本が事件現場に花を添え、祈る。

徐々に明るさを増す。

ラジオ音声　「海外ニュースです。ヨーロッパ史上稀にみる負の歴史を残した、あのナチスが解体されてから、７０年以上経過した今、アドルフ・ヒトラーの出身地、オーストリアにヒトラーの血族を名乗る青年が現れました。この青年のもとに熱狂的な若者達が集結し、ナチズム復活を目指す、所謂「ネオ・ナチ」の活動が俄かに活発化してきている模様です。これと呼応するかのように、ヨーロッパ全土に極右勢力が台頭してきており、同様の動きはロシアにまで波及している模様です。」

電波が混信し、雑音が流れる。

雑音プツッと切れる。

穏やかな日差しの午後。小鳥のさえずり。

松本が今は亡き山中夫妻に話しかける。

松本　山中さん、真理子さん、いったい何があったのさ？　ニュースで言ってるような暴力団の抗争だなんて、あたしゃ信じちゃいないよ。

三枝っていう教授の話をした翌日に、教授とあんたたちが殺されたなんて、あんたたちの間に何が隠されていたの？　私がバスに乗るときにバスから降りて

きた娘が、敏ちゃんと一緒に死んでいたという身元不明の女なんだろ？
秩父の警察に問い合わせしても埒が明かない。私の話には興味がないみたいよ。
警視庁の本庁に強引に捜査本部が移されたんだって。なんだかとてつもなく大きな権力が動いているらしい。

週刊文秋も動き出したよ。あそこの編集長が言っていた。この事件には、とんでもない闇が隠されているんじゃないかって。
あたしも編集長に協力することにした。そして闇の正体を暴き出して書くよ、ノンフィクション小説をね。私にできるのはそれだけだよ……安らかに休んでちょうだい。
（しばらくの沈黙の後、何かの気配を感じ、見えない敵に向かって）いったい何を隠しているんだ！　何を守ろうとしているんだ！

音楽の高まりと共に

―幕―